

組織病理カラーアトラス



著：坂本 穆彦，北川 昌伸，
菅野 純

B5 頁 408 2008 年
定価 10,500 円(本体 10,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00507-4] 医学書院刊

医科大学あるいは研究所で第一線の病理医・病理学研究者として活躍の方々が自身で撮影した美しい病理組織のカラー写真が、本文 383 頁の本に 613 枚と極めて多数収録されている。ここに著者らの考えが如実に現れていると思われる。病理組織学的所見をいくつ事細かく文章で表現しても、絶対に真実を正しく表現することができないという考えがわれわれ病理医・病理学者にはある。講義あるいは CPC にはなるべく多くの病理組織像を提示し、できるだけ少ない言葉で説明するのが正しいやり方であると私は考える。口数ばかり多くて実際の肉眼像や病理組織像の少ない発表は信用するわけにはいかない。本書を読むと、できるだけ具体的な病理組織カラー写真を多くし、必要にして十分な最小限の文章を加えた本にしたいと、著者らが病理組織カラーアトラスの理想像を追及する情熱が感じられる。もしかしたら著者は私の考えそのものを具体化してくれたのではないかと錯覚に陥る。

医学・医療は日進月歩であり、最近の画像診断

の進歩に目を見張るものがあるが、画像診断は統計学をベースにした診断であって、病気の本当の診断ではない。画像は病気そのものをみているのではなく、病気の影を見ているにすぎない。“このような影を示す病変は何パーセントの確率でこういう病気が考えられる”というのが画像診断である。世の中で大家と称される臨床医の中に最近では画像診断が進歩したので病理解剖を行う必要はなくなった、との考えを持つ人が少なくないのに驚かされる。このような臨床医の診療を受ける患者のことを思うと怒りよりも悲しみを覚える。画像診断の発達により、複雑多岐にわたる人間の病気にはしっかりした病理組織学的裏付けがあることを最近の臨床医は忘れがちで、それが誤診のもとになっているのではないかと私は大いに危惧している。病理診断を行う病理医の務めはできるだけ多数の病理組織標本を診て、臨床医の常識を打ち破る例外を見つけることであると私は考えている。

最近、宇宙ステーションの写真を見て初めてニュートンの万有引力の法則は正しかったと思った。それまではリングが木から落ちるのを見て、地球が引っ張っていると考えるなど、想像しがたいことであると思っていた。病理組織標本は人間の病気にとっての宇宙ステーションの写真のようなものだと思う。

序文に著者が述べているように、本書は一般の医学徒に、初心者、中堅、ベテランの方々、いずれにも有用であり、また、病理医を志す若い方々にも有用であると思われる。